



如是閑と魯迅

長谷川如是閑——。これ、何と読むか知っていますか？ 以前まわりの学生に訊いてみたことあるが、正解はゼロだった。惜しかったのは、ハセガワジョゼカン。

長谷川如是閑（1875～1969）は、東京法学院（中央大学の前身）が生んだ希有な知識人である。明治・大正・昭和を通じて日本の知性を代表したひとりといっている。その如是閑に、「支那人の顔其他」というエッセイがある（『犬・猫・人間』所収 改造社 1924年 表記は原文のまま）。

如是閑は言う。支那人の顔にはどこか「特異感を感じる」。西洋人の顔は「人間+獣」で、日本人の顔は「人間+日本人」だが、支那人の顔には何かかぬけていて「人間-X」を感じる。だが、支那人の顔は見慣れるとまさに「文法的

に正しい顔」であり、苦力の顔といえども正しい顔であることに気づく。すると、かえって我々の顔が野蛮であることに気づかされる…。

如是閑は1921年秋に初めての中国旅行をしているから、その時の体験に基づいているのだろう。ところで、日本に長く留学したことのある魯迅（1881～1936）は「中国人の顔について」（1927年『而已集』）という雑文でこの如是閑のエッセイをとりあげ、人間は人間の顔であればそれでいいのだが、「人間+家畜=ある種の人間」になるくらいなら獣が加わった方がマシだ、と言っている。如是閑、魯迅ともに目配りの広さ深さは群を抜いていた。その文体は幾重にも屈折し、複眼思考の持ち主ならではのものだ。魯迅は如是閑に並々ならぬ関心をよせ、その隨筆を2編訳出している。後年知人にあてた手紙で、如是閑の全集が出ていることを告げたあと、「この人の観察は極めて深刻で文は晦渋であり」「訳出はととても難しい」と伝えている（1933年、陶亢徳あて）。

広報委員 渡辺 新一（商学部教授）

編集室

今号では、特別企画として、初めて『Hakumonちゅうおう』学生記者有志の講演会『今を生きる』あなたちは顔で差別をしますか』を催しました。

藤井さんには当初、学生記者が単独取材する予定でした。しかし、藤井さんと事前にお会いしてお話を聞くうちに、「多くの人たちに藤井さんのお話を直接聞いていただきたい方が、いいと思います」との提案が学生記者から持ち上がり、講演会を企画した次第です。

初の試みであり、開催日までが短期間だったこともあり、学生記者は準備に追われながら、「うまくい

くのか？」と不安を抱えて講演会当日を迎えました。

さて、当日は約80人が会場に足を運んでくださいました。予想以上だったのでしょうか。学生記者は、まずは「よかったです」とほっと胸を撫で下ろしました。そして何より、藤井さんの講演は、聴いてくださった方々に大きな感銘を与えたのです。

「正しい知識、情報を学ばないことが偏見・差別を生む」「お喋りよりも行動で、人格を見極めることが大事」「一人でも立ち上がり、行動する勇気が将来につながる」等々、私自身も胸に響き、心に沁みのお話

が随所にありました。講演を聴いた方々からいただいた、たくさんのご感想は、「聴講者の感想」として掲載しましたので、講演内容と合わせ、ぜひお読みください。

（入学企画課 伊藤博）

学生記者が取材・編集する大学広報誌

Hakumon

ちゅうおう

2008

冬季号

2008年(平成20年)12月15日発行 No.209

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

『Hakumonちゅうおう』編集室

☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141